

言葉の向い方に

夜中に、はっと目が覚めた。すぐにベッドから起き出してリビングへ降り、パソコンの電源をつける。画面の光が部屋の片隅にまぶしく広がった。

私は、ヨーロッパのあるサッカーチームのファン。特にエースストライカーのA選手が大好き。ちようど今頃、向こうでやっている決勝の試合が終わったはず。ドキドキしながら試合結果が分かるサイトをクリックした。やった、勝った。A選手、ゴール決めてる。

思わず声が出てしまった。大声出したら家族が起きちゃう。そつと一人でガツポーズ。

みんなもう知ってるかな。いつものように日本のファンサイトにアクセスした。画面には、「おめでとう」の文字があふれてる。みんな喜んでる。嬉しくて胸がいっぱいになった。私もすぐに「おめでとう」と書き込んで続けた。

〈A選手やったね。ずっと不調で心配だったよ。シュートシーンが見たい。〉
すると、すぐに誰かが返事をくれた。

〈それなら、観客席で撮影してくれた人のが見られるよ。ほら、ここに。〉

〈Aのインタビューが来てる。翻訳も付けてくれる。感動するよ。〉

画面が言葉で埋め尽くされていく。私は夢中で教えてくれたサイトを次々に見に行った。

学校でもサッカーの話をするけど、ヨーロッパサッカーのファンは男子が多



い。私がA選手をかつこいいいよね、って言っても女子同士ではあんまり盛り上がりがない。寂しかったけど、今は違う。ネットにアクセスすれば、ファン仲間がいっぱい。もちろん顔も知らない人たちだけど。今この瞬間、遠くの誰かが私と同じ感動を味わってる。なんか不思議、そして嬉しい。気が付くともうすぐ朝。続きはまた今夜にしよう。

今日は部活の後のミーティングが長かった。家へ帰ると、食事を用意して待っていた母に、「ちよつと待ってて。」

と言って、パソコンに向かった。優勝後のインタビューとか、もつと詳しく読めるかな。楽しみ。

〈Aは最低の選手。あのゴール前はファールだよ、ずるいやつ。〉

開いた画面から飛び込んできた言葉に、胸がどきつとした。なに、これ。

〈人気があるから優遇されてるんだろ。たいして才能ないのにスター気取りだからな。〉

ひどい言葉が続いてる。読み進むうちに顔がほてってくるのが分かった。

怒りでいっぱいになって夢中でキーボードに向かった。ファンサイトに悪口を書くなんて。

〈負け惜しみなんて最低。悔しかったら、そっちもゴール決めたら。〉

すると、また次々に反応があった。

〈向こうの新聞にも、Aのプレイが荒いって、批判が出てる。お前、英語読めないだろ。〉

〈Aのファンなんて、サッカー知らないやつばかり。ゴールシーンしか見てないんだな。〉

〈Aは、わがまま振りがチームメイトからも嫌われてるんだよ。〉

必死で反論する私の言葉も、段々エスカレートしていく。でも絶対負けられない。

「加奈子、いい加減にしなさい。食事はどうするの。」

母の怒った声。はっと気付いて時計を見た。もう一時間も経^たってる。

「加奈ちゃん、パソコンは時間を決めてやる約束よ。」

ずっと待たされていた母は不機嫌そうだ。

「ごめんごめん。ちよっと調べてたらつい長くなっちゃって。」

「そうなの。なんだか怖い顔してたわよ。加奈ちゃん、こっちに顔を向けて話しなさい。」

「はあい、分かりました。ちゃんと時間守ります。お母さんのご飯おいしいよね。」

そう言いながらも、私の頭はA選手へのあのひどいコメントのことでいっぱいだっただ。

「まったく調子いいんだから。でもね、ほんとかどうか目を見れば分かるのよ。」

私は思わず顔を上げて母を見つめた。その表情がおかしかったのか、母がぶっと吹き出した。つられて私も笑った。急にお腹がすいてきちゃった。

食事の後、サイトがどうなっているか気になって、恐る恐るパソコンを開いてみた。

〈ここにA選手の悪口を書く人もマナー違反だけど、いちいち反応して、ひどい言葉を向けてる人、ファンとして恥ずかしいです。中傷を無視できない人はここに来ないで。〉

ええーっ。なんで私が非難されるの。A選手を必死でかばってるのに。

〈A選手の悪口を書かれて黙っているって言うんですか。こんなこと書かれたら、見た人がA選手のことを誤解してしまうよ。〉

〈あなたのひどい言葉も見られています。読んだ人は、A選手のファンはそういう感情的な人たちだって思っちゃいますよ。中傷する人たちと同じレベルで争わないで。〉

なんで私が責められるのか全然分からない。キーボードを打つ手が震えた。

〈だって悪いのは悪口書いてくる人でしょ。ほっとけって言うんですか。〉

〈挑発に乗っちゃだめ。一緒に中傷し合ったらきりがないよ。〉

優勝を喜び合った仲間なのに。遠くのみんなとつながってるって、今朝はあんなに実感できたのに。なんだか突然真つ暗な世界に一人突き落とされたみたいだ。

もう見たくない。これで最後。と、もう一度画面を更新した。

〈まあみんな、そんなきつい言い方するなよ。ネットのコミュニケーションって難しいよな。自分もどうしたらいいかなって、悩むことよくある。失敗したなーって時も。〉

〈匿名だからこそ、あなたが書いた言葉の向こうにいる人々の顔を思い浮かべてみて。〉

えっ、顔。思わず私はもう一度読み直した。そして画面から目を離すと椅子の背にもたれて考えた。

そうだ……。だめだなあ。何で字面^{じづら}だけにとらわれていたんだらう。一番大事なことを忘れていた。コミュニケーションしているつもりだったけど。

私は立ち上がり、リビングの窓を大きく開け、思いっきり外の空気を吸った。

「加奈ちゃん。調べ物はもう終わったの。」

台所から母の声がする。

「調べ物じゃないの。すごいこと発見しちゃった。」

私は、明るい声で母に言った。